

## 令和3年産水稻の作況調査結果と当面の技術対策

技術支援課  
(普及指導室)

生育ステージ	<p>早期：乳熟期～黄熟期</p> <p>早植：穂ばらみ期～乳熟期</p> <p>普通期：幼穂形成期～減数分裂期</p>
生育概況	<p>早期：「コシヒカリ」の出穂期は平年並であった。出穂後の高温や乾燥・強風の影響による白未熟粒等の発生が懸念される。</p> <p>早植：「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の出穂期は平年より2日程度早まった。乾燥・強風・低温等による品質・収量への影響が懸念される。</p> <p>普通期：「あさひの夢」の出穂期は平年並～やや早まる見込み。7月の天候不順による生育の遅れは回復し、分けつもやや多い。</p>

## 1 気象経過 (前橋地方気象台の気象データ、8月は第3半旬までのデータ、参考資料参照)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
気温(平年差)	+0.6℃	+0.5℃	+0.8℃	+0.3℃	±0℃	—	—
降水量(平年比)	68%	71%	125%	188%	222%	—	—
日照時間(平年比)	108%	83%	99%	111%	96%	—	—

## 2 生育概況

## (1) 概要

## ア 早期・早植栽培 (6月15日以前の田植)

早期栽培「コシヒカリ」の生育ステージは、乳熟期～黄熟期となっている。生育前半の生育が良好だったため茎数は平年よりやや多く、出穂期は平年並であった。登熟期前半の高温や8月2半旬の乾燥・強風、8月中旬の低温・日照不足等の影響により白未熟粒やくず米の発生が懸念される。

早植栽培「コシヒカリ」「ひとめぼれ」の生育ステージは、穂ばらみ期～乳熟期となっている。梅雨明け後の高温の影響により出穂期は平年より2～3日早まった。茎数は概ね平年並に確保されている。高温や乾燥・強風等に遭遇したため、白未熟粒や不稔、もみずれ、内穎褐変病の発生が懸念される。また、8月中旬の低温の影響は、その時期に出穂期を迎えたほ場では出穂・開花の長期化が見込まれ、登熟日数の増加や登熟の不揃いによる品質への影響が懸念される。病害虫は、一部で葉・穂いもちが散見され、中山間地域の一部で斑点米カメムシ類がやや多い。

## イ 普通期栽培 (6月16日以降の田植)

普通期栽培「あさひの夢」の生育ステージは幼穂形成期～減数分裂期となっている。7月の日照不足の影響で生育が停滞したが、梅雨明け以降の高温により生育の遅れは回

復した。茎数は平年並～やや多く、出穂期は平年並～やや早まると見込まれるが、8月中旬の低温・日照不足・長雨による生育の停滞といもち病の発生が懸念される。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

ア 早期・早植栽培

葉いもちが一部で平年より多い。  
斑点米カメムシ類が中山間地の一部で多い。

イ 普通期栽培

葉いもちが一部で散見される。  
強風による葉先枯れが散見される。

(3) 作況ほ等の調査結果

表1 水稲作況ほ調査結果（地域別・作期別）（ ）内は平年比

調査項目 地区	移植期 月/日	移植後20日調査		移植後40日調査		出穂期	
		草丈 cm	茎数本/m <sup>2</sup>	草丈 cm	茎数本/m <sup>2</sup>	カ所数	月/日
県	6/ 4 (0)	31(100)	163( 90)	59(101)	468(103)	9/15	8/5(-2)
中部	6/14(-1)	33(104)	177( 85)	63(102)	442(108)	1/ 4	8/7(-4)
西部	6/10(-1)	30( 96)	158( 94)	61( 94)	465(104)	2/ 4	8/3(-3)
北部	5/21(+1)	29( 98)	153( 94)	48(102)	477( 96)	4/ 4	8/5(-1)
東部	6/ 2(+1)	31(103)	164( 86)	64(107)	494(108)	2/ 3	8/7(-1)
早期・早植	5/26(-1)	28( 96)	169( 87)	55(100)	468( 97)	9/10	8/5(-2)
普通期	6/21( 0)	36(107)	150(100)	67(100)	466(108)	0/ 5	—

- 注1) 県、地区、作期別の平均値はいずれも算術平均とした。  
 2) 移植期欄の( )内の「-」は早い、「+」は遅いを示す。  
 3) 8月15日現在で調査時期となったほ場のみの値で、カ所数欄は[調査カ所/設置カ所数]を示す。  
 4) 早期・早植：6月15日以前の田植。普通期：6月16日以降の田植。

ア 作況ほの調査結果（表1参照）

県平均の移植後40日の草丈は59cm（過去平均比101%）、茎数は468本/m<sup>2</sup>（同103%）であった。出穂期は8月5日（同-2日）であった。

イ 農業技術センターの生育基本調査結果

(ア) 稲麦研究センター（6月24日移植）

「ゆめまつり」の移植後40日の草丈は65cm（過去8カ年平均比90%）、茎数は630本/m<sup>2</sup>（同119%）であった。幼穂形成始期は8月3日（同2日遅）であった。

(イ) 東部地域研究センター（6月1日移植）

「ゆめまつり」の移植後40日の草丈は68cm（過去10カ年平均比110%）、茎数は637本/m<sup>2</sup>（同88%）、幼穂形成始期は7月27日（同1日早）であった。

(4) 作柄のまとめ

各地域の作柄はすべて「並」であることから、県全体で「並」が見込まれる。

表2 地帯別作柄概況

( ) 内は普及指導課・地区農業指導センター

地域別	作柄	作柄概況
中部 (中部) (渋川) (伊勢崎)	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早植栽培：出穂期～乳熟期。梅雨明け後の高温のため、出穂期は平年より2日程度早まった。乾燥強風の影響による不稔や白未熟粒の発生が懸念される(中部)。</li> <li>・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。7月の低温・日照不足の影響で初期生育が遅れたが、梅雨明け後の高温により回復した。生育は順調で茎数はやや多い。出穂期は平年並～やや早まる見込み。穂いもちが懸念される(伊勢崎)。</li> </ul>
西部 (西部) (藤岡) (富岡)	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早植栽培：出穂期～乳熟期。日照不足で生育が停滞したが出穂期は2日早～平年並に回復。葉いもちが多く一部でずりこみとなった(富岡)。出穂直後に強風に遭遇したほ場ではもみずれや内穎褐変病の発生が懸念される(西部)。</li> <li>・普通期栽培：幼穂形成期～穂ばらみ期。7月の日照不足等により生育が遅れたが、梅雨明け後の高温のため遅れは回復した。出穂期は平年並を見込む。一部で育苗中や本田で葉いもちの発生が多かった(西部、藤岡)。</li> </ul>
北部 (吾妻) (利根沼田)	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早植栽培：穂揃い期～乳熟期。出穂期は平年並～3日早い。7月の日照不足の影響は軽微。イネドロオイムシの被害が多かったが、気温上昇とともに回復した(利根沼田)。斑点米カメムシ類の発生が目立ち、被害が懸念される。一部の箱施用剤不使用ほ場で葉いもちが発生した(吾妻)。</li> </ul>
東部 (東部) (桐生) (館林)	並	<ul style="list-style-type: none"> <li>・早期栽培：コシヒカリは乳熟期～黄熟期、あさひの夢は出穂期～乳熟期。コシヒカリの出穂期は平年並。出穂後の高温や乾燥・強風の影響による白未熟粒の発生や稔実への影響が懸念される(館林)。</li> <li>・早植栽培：コシヒカリ、ひとめぼれは穂ばらみ期～乳熟期。あさひの夢は減数分裂期～穂ばらみ期。コシヒカリ・ひとめぼれの出穂期は平年より1日(桐生)～5日(東部)早まった。高温や乾燥・強風等による白未熟粒の発生や稔実への影響が懸念される(館林)。一部で葉・穂いもち、中山間地ではカメムシ類が多い。</li> <li>・普通期栽培：幼穂形成期～減数分裂期。梅雨明け後の高温により日照不足の影響は回復。茎数は概ね平年並だが一部でやや少ない(館林)。出穂期は平年並～やや早まると見込まれる。一部で葉・穂いもち、紋枯病、強風による葉先枯れが散見される。</li> </ul>

### 3 技術対策

#### (1) 共通

- ア 気象庁発表による長期予報では向こう1か月の気温が高温となる確率は60%と予想されている。そのため、高温障害による品質への影響が懸念されることから、以下のとおり適正な水管理や適期収穫等の基本技術を徹底し、被害の軽減を図る。
- イ 高温による生育の前進を見据え、計画的な作業とその準備に努め、荷受け施設においては水稻の生育に応じた稼働計画を設定する。
- ウ 農薬散布については適正使用を心がけ、使用履歴の記帳を徹底する。
- エ 葉いもちの病斑が上位葉に多い場合など、穂いもちの発生が懸念される場合は穂ばらみ期および穂揃い期に防除を行う。

#### (2) 早期・早植栽培

- ア 乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、高温が予想される場合は飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。
- イ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。
- ウ 出穂後30日以降を目安に落水し、その後は必要に応じて走水を与える。
- エ 高温日が連続すると登熟期間が短縮しやすいことに留意する。また、白未熟粒や胴割

粒の発生が懸念されることから、成熟状況を確認して適期収穫を徹底する。

オ 急速乾燥や過乾燥は胴割粒の発生を助長するため、乾燥作業には十分留意し、毎時乾減率は0.8%以下で乾燥を行う。

(3) 普通期栽培

ア 穂ばらみ期～出穂開花期は湛水、乳熟期以降は間断かん水を基本とするが、出穂後に高温となる場合は、飽水管理や夜間かん水などにより、根の活力維持と稲体付近の温度低下を図る。

イ 台風襲来時やフェーン現象などの高温・乾燥の強風時は、風が止むまで深水管理とする。

ウ 病害虫の発生状況、発生予察情報を踏まえ、効果的防除を心がける。稲こうじ病が発生した履歴のあるほ場では出穂前の適期に防除を行う。

《参考資料》

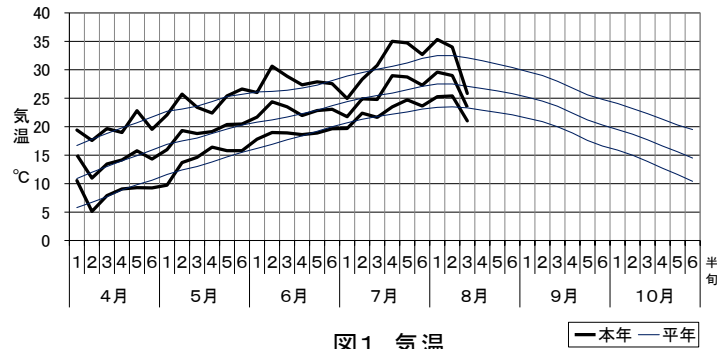


図1 気温

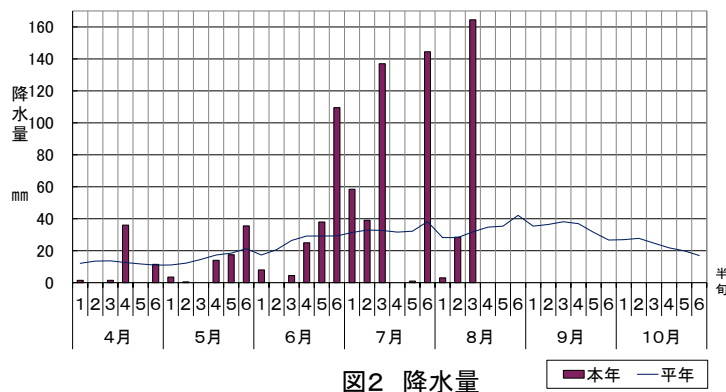


図2 降水量

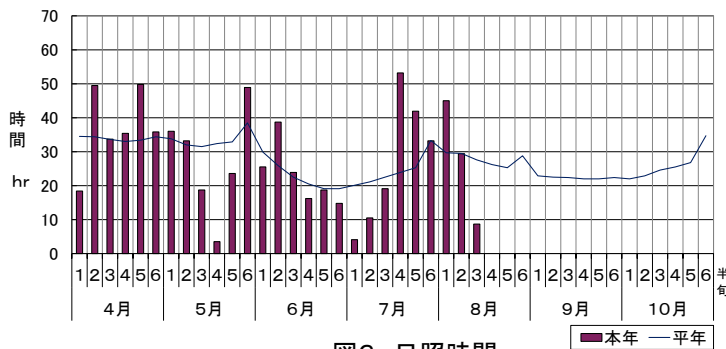


図3 日照時間